障がい者との交流サロン　地区内で開催

誰もが共に支えあって生きられる共生社会促進事業として、2回目の障がい児者交流ふれあいサロンを、3月11日公民館ホールで、市社協と共催した。

参加してくれた障がい児者は中川町の「まなび」をはじめ八幡、里矢場、大橋、板倉、葉鹿から8組22名と、7月に山辺に障がい者グループホームを開設予定の事業体から2名。

当方は、自主志願の高校生や会場に顔を出してくれた小学生も加えて34名。

昨年の経験から、見る・聞くのワンウェイは無くして、参加者が交流の中で共に創り出すものに注力した。ボランティア参加者も障がい児者との卓での会話交流に積極的に参加しサロン雰囲気を和らげ、ゲームコーナーでも共にプレーを楽しんだり。

そして会場の心を一つにまとめてフィナーレに盛り上げていくのはサロン四季の童謡コーラス隊。参加した全員の、お互いを思いやる心を込めた合唱が会場に満ちて、一人一人がこのひと時を共に過ごせた感謝と感動の内に閉会することができた。

地域社会での障がい児者との交流が更にノーマライズしていくためにはこの様な活動の継続が大切であろう。

勝部麗子CSW　熱き思いを語る

本年1月28日に、市社協設立25周年記念事業の一環として、地域福祉講演会がプラザ大ホールにて開催された。

講師はその活躍ぶりがテレビドラマ「サイレントプア」のモデルにもなった地域福祉の究極のプロと評される豊中市社協のCSW（コミュニティーソーシャルワーカー：社会福祉士）勝部麗子氏。地域の現場に飛び込み住民と共に問題解決に取り組んできた事例と信念が「ひとりぼっちをつくらない」という演題で語られ、多くの感動と共感を呼んだ。

山辺の今昔譚　第9回

「日本整形外科の父　田代義徳博士の足跡を尋ねて」

田代義徳博士顕彰会

その四　先進国留学から　東大教授へ

36才（明治33年）、文部省留学生としてドイツ・オーストリア両国へ派遣を命じられる。当時ドイツでは外科学会から整形外科学会が創設され、活気に溢れる時代を迎えていた。

この機に義徳は躍動するヨーロッパ整形外科学会に身を置いて、その伝統と技術を学び、大きな成果を上げたのである。留学中に助教授となり、明治37年帰国し、医学博士の学位を授与される。

田代博士の肖像画
顕彰会誌より

42才（明治39年）東大医学部教授になり大学内に日本初の整形外科学講座を開設。全国から優秀な門弟達が集まり熱心に学んだ。義徳博士がドイツ・オーストリア留学で学んだ医術が良き門弟達に引き継がれ、日本整形外科の根幹を形成していった。

義徳博士の生誕百周年を祝う座談会で、弟子の一人が次のように述べている。「義徳博士が東大に整形外科講座を開設されて今年（昭和40年）約60年であるが、全国46の医大すべてに整形外科が置かれている。その内31の大学の教授が義徳先生の直弟子である。博士の教えが大木となり、枝を伸ばし、葉を茂らせていると言える。」

この事実が博士の最も大きな業績であろう。

（次回は博士の母校山辺小への思いを記します。）